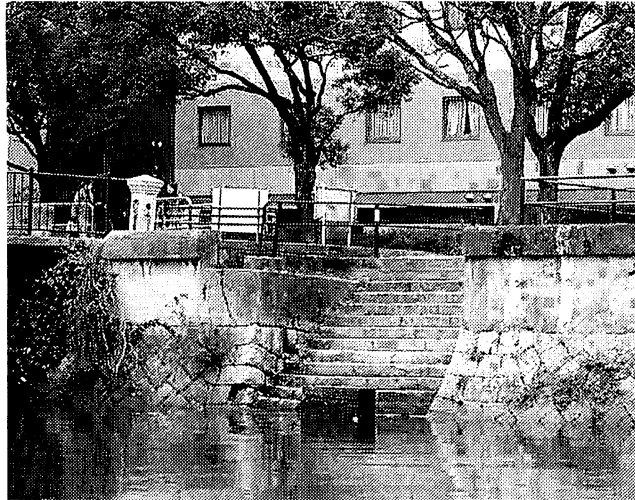


広島・京橋川に残る石積みの船着き場

「雁木が選奨土木遺産に」

広島市を流れる京橋川に多数残る階段状に石を積んだ船着き場「雁木」が、文化的な評価が高い近代土木建築を顕彰する土木学会「選奨土木遺産」に選ばれた。明治後期から大正時代に築かれたと推測され、国内最大の雁木群という。原爆で古い建物がほとんど残っていない広島市中心部で、認定は初めて。往時の繁栄や庶民の暮らしを伝える貴重な建造物であり、川を生かしたまちづくりへの一層の活用も期待される。

【宇城昇】



河岸に残る雁木―中区銀山町の京橋川で

雁木は、干満差が最大約4メートルある広島川の川に上手に水運に利用するため、市街地を流れる6本の川に数多く築かれ、300力以上が現存する。材木などの積み降ろし用の幅の広い大雁木から、庶民が洗濯などに使った幅1メートルに満たないものまである。

高潮対策の改修などでコンクリート護岸が増え、太田川本流から京橋川が分かれて下流約3



珍しい天井付きの雁木
―中区橋本町の京橋川で

「庶民の暮らし伝え、形式も多彩」

この区間には、周囲の石組みの様式などから古い雁木が多く残っていることが分かった。川の流れると直交や並行、途中に踊り場を設けて向きが変わるなど、多彩な形式の雁木があるのも特徴だ。土木学会から「水の都・広島を象徴する歴史的な水

木組」は、小型ボートを使った水上タクシーの発着場として約50カ所を利用する。氏原睦子理事長は「遺産として単に保存するのではなく、上手に使いながら雁木を残したい。今回の認定を機に、『雁木の街』に暮らしを深めたい」という。